

1. 17世紀の記録

(1) Nikolaas Witsen (1692) による記録

コサックからの伝聞として、カムチャツカ半島南部の住人が土器を使っていると記録。

(2) アトラーツフの陳述書

※ロシア司法省古文書部（モスクワ）で歴史研究者オグロブリンが発見（Оглоблин, Н. 1891）。

【V. アトラーツフの第一陳述書 1700年6月3日 ヤクーツク】

…カムチャツカ半島には、コリヤーク、リュトル、カムチャダール、クリルといった民族が居住する。

…「そこ（バリシャヤ川…高瀬註）から出発すると、彼等はずいにクリール人の6つの柵に出会った。そこは人の数も多く、陛下の慈悲の下に入るよう訴え、ヤサークを要求した。しかしそのクリール人たちは命令に従わなかった、つまりヤサークを出さず、ヴォロジミルたちに戦いを挑んできた、それで彼と兵士は3つの柵のうち1つを占領し、柵にいて抵抗したクリール人約50人を全員殺した。」

（佐々木訳 2009 を一部改変）

→「柵」は「砦」とも訳される。チャシとの関連性を示唆か？接触当初から戦闘状態。

…「なおヴォロジミルがヤサークとして国庫に納めるべく集めたものは、クロテン8ソーロク [40匹1束の単位がソーロク…高瀬注]、赤キツネ191匹、クロアカギツネ10枚、ラッコ10枚、テンのパルカ（冬用上着）、ラッコの切れ端7枚、カワウソ4匹、それに彼らと行動を共にして以前からヤサークを納めていたユカギール人のクロテン42枚、赤キツネ26枚であった。また大抵のクロテンには尻尾がなかった、なぜなら彼らカムチャダール人はクロテンの尻尾を切りとり、粘土の接着を強めるために毛を粘土に混ぜて土鍋を作ったり、耳当てを縫ったりするからである。

※（用紙の裏、貼り合わせ箇所）「ヤクーツク町の五十人隊長ヴォロジミル・アトラーツフが署名」とある。」

（佐々木訳 2009 を一部改変）

→カムチャダールが、毛を粘土に混ぜて土器を作る？

【V. アトラーツフの第二陳述書 1701年モスクワ シベリア庁】

…「ペンジナには、あご髭を生やしていないコリヤーク人が住んでいる。顔は赤銅色、中背で、独特の言葉話す。信仰は持たないが彼らの仲間のシャーマンは、彼らが必要とすることについてシャーマニズムを行い、タンバリンをたたき、叫び声をあげる。トナカイの皮から作った衣服と履物を身につけ、靴底にはフィリアザラシの皮を使っている。魚とあらゆる獣そしてフィリアザラシを食べる。彼らのユルタはトナカイやヘラジカの皮を縫い合わせてできている。このコリヤーク人の向こうには異郷人リュトレツ人が住んでいる。言葉などあらゆる点でコリヤーク人に似ているが、リュトレツ人のユルタはオステヤク人 [西シベリアのハンティ人の旧称] のそのように土でできている。

このリュトレツ人のさらに先には、川沿いにカムチャダール人が住んでいる。背は低く、適度な長さの

あご髭を生やし、ズイリヤン人〔ウラル西側のコミ人の旧称…高瀬注〕に似た顔つきをしている。クロテン、キツネ、そしてトナカイから作った衣服を着ており、その服を犬毛で覆っている。彼らの冬用ユルタは土でできており、夏用ユルタは地面から3サージェン〔1サージェン=約210cm…高瀬注〕ほどの高さに板を張り、エゾマツの樹皮で屋根を葺いている。このユルタには、はしごで上り下りする。ユルタ同士は離れておらず、1カ所に200、300、400棟のユルタがある。魚と獣肉を常食とし、魚は生のままや凍ったものを食べる。冬に備えて生魚を蓄える。穴の中に入れ、土をかぶせ、魚を発酵させる。この魚を取り出し、丸太をくりぬいた桶に入れ、水を満杯まで注ぐ。石を焼き、桶に入れ、水を加熱する。そして魚と水をかき混ぜて溶かし、これを飲むのである。この魚からは悪臭がするので、ロシア人は必要に迫られても耐えられない。木製の皿と粘土製の鍋はカムチャダール人自身が作るが、他にも下塗りを施した食器とボイル油塗りの食器がある。彼らが云うには、これらの容器は島からもたらされる。この島がいかなる国の支配下にあるのか、彼は知らない。まったく信仰を持たず、シャーマンだけがいる。彼らのシャーマンは、他の異郷人のシャーマンと違って長髪である。

カムチャダールの地の山脈沿いに、トナカイを遊牧するコリヤーク人が住んでいる。

ロシア人のもとで暮らす捕虜たちは、これらのカムチャダール人たちと、ロシア人が話すことになるあらゆる話をコリヤーク語で話す。彼、ヴォロディメルはコリヤーク語やカムチャダール語をまったく話せない。

カムチャダール人のはるか彼方にクリルの異郷人が住んでいる。彼らの外見はカムチャダール人よりも色黒であご髭が短い。クリルの地はカムチャダールの地よりも温暖である。衣服はカムチャダール人と同様のものを身につけているが、ただカムチャダール人よりも貧相である。クリルにはクロテンがいるけれども、気候が温暖なため毛並みは悪い。一方、大型のラッコや赤毛のキツネが豊富である。このクリルの異郷人のはるか彼方にどのような人びとが住んでいるのか、またその地が遠いのかは不明である。

※文書の下余白部分、文章の末尾に署名がある：本陳述書に、ヤクーツク・コサック五十人隊長ヴォロトカ〔ヴラディミル〕・アトラソフが署名しました。」

(斉藤・小野寺訳 2008 を一部改変、このほか加藤訳 1970、佐々木訳 2009 による翻訳もあり)
→「粘土に毛を混ぜる」、「リュトルには鉄器がない」といった細部の記述には疑問符がつく部分もある。しかしながら、各集団の風習・シャーマニズム・言語・外見については、19c 末～20 世紀はじめの民族誌とかなりの一致をみせる。

→17 世紀後半～末においては、カムチャツカ半島南半部の住民は土器を使っていたようである。ただし、それがイテリメンかクリルかは明確ではない。ただし、イテリメンには土器を使う伝統はないとされており、カムチャツカ南半は完新世をとおして基本的に土器づくりの伝統がない地域。

(3) **デムベイの陳述書** (1695 年大坂から江戸への航海中漂流、1697 年アトラソフに会う、1702 年ピョートル I 世に謁見、直邸によりペテルブルグにつくられた日本語学校で教える)

* 国立中央古文書史料館 (モスクワ) 保管の原点末尾の署名から 1968 年に E・Ya・ファインベルグがデムベイを確定。服部誠一が、タチカワあるいはタテカワ・デムベイと特定。

…「彼らが乗った船は海上で波を受けて操縦できなくなり、どこへ流されたのか彼にはわからなかったという。〔伝兵衛らの乗った〕船は暴風のため 28 週間、海を漂流した。彼らは風をよけるために帆がついた

まま帆柱を切り倒して海に捨てたが、帆と一緒に2人が海に落ち、溺死した。船には大坂から持ってきた淡水が積んであり、その水は2ヶ月分相当あったが、水がつかると彼らは米を酒で煮た。そして酒はちびりちびり飲み、米は砂糖や氷砂糖で甘く味付けし、少しずつ分けて食べた。風が止んでから彼らが羅針盤で現在地を測定してみたところ、はるか遠くまで流されたことがわかり、どうやって帰ったらよいものかと思案にくれた。海上で根っこの付いた小さな流木を見つけたので、それを帆柱のかわりに船に立て、^{どんす}緞子で帆を縫った。

彼らはその帆のおかげでクリルの地まで流れ着いた。川を発見し、その川をさかのぼると、クリル人たちのいるところにたどり着いた。クリル人のひとりが彼らに近づいてきたので、彼、伝兵衛は仲間とともに、せめて自分たちのことを知らせるつもりで、その土地や言葉を知るため紙に書きとめはじめた。そして、相手にも自分の言葉で書いてもらおうとその書付けをこのクリル人に渡した。ところが、カムチャダールやクリルの地では人びとはいかなる文字も持たないので、クリル人はその紙をふところにしまい、彼らから立ち去った。そして夜中に40艘の小舟で200人ほどのクリル人がやってきて、伝兵衛一行が乗っている船に矢を射始め、石や骨で作った斧で彼らの船を切りつけだした。彼、伝兵衛は矢で左手の指に傷を負った。伝兵衛一行は彼らが大勢なのを見ると、船から緞子や南京木綿、鉄を運び出し、彼らに与え、命乞いをした。クリル人はその緞子も南京木綿も鉄も彼らから取って行った。彼らは米や砂糖のにおいにかいだが、何のにおいもしなかった。500樽ほどあった酒もちょっとにおいを嗅ぐと、樽をたたき割った。そして米や砂糖は投げ捨て、酒は海中に流してしまい、樽は魚を入れるために残しておいた。というのも、クリルやカムチャダールの地では、異郷人は容器というものをまったく持たず、魚は穴に入れ、その上に木や草で覆っているからである。魚がすべて石けんが泡立つように発酵すると、それを桶に入れ、水を注ぎ、焼けた石で熱し、さらにそこへベニテングダケを加えてそれを飲むのである。それを客や仲間にするまい、酩酊することもしばしばある。伝兵衛一行はその飲み物を飲むことはできなかったが、植物の根やそれほど傷んでいない魚を食べた。

クリル人たちは、漂流中ひどく鳴いて気が狂った、伝兵衛の仲間2人を殺害した。あるものは彼、伝兵衛をカムチャツカ川に連れて行った。一方、彼の仲間10人はこれらクリル人のもとに残った。伝兵衛が仲間と一緒にクリル人のもとで暮らしたのは1ヶ月ほどだった。…伝兵衛の日本語による署名。」

(松本・小野寺訳 2008 を一部改変)

2. 18世紀の記録

(1) コズィレフスキー (1726)

※1713年ポリシェレツクからパラムシル島までわたる。1711年にカムチャツカに漂着シイテリメンにとらえられていたが救出した日本人サニマが同行。パラムシル島でエトロフ島から交易にきていたシャタノイから千島列島に関する情報を入手。→「海島海図」(1726)の作成へ

第1島シムチュ。クリルという異人が住む。遠い島々に行く。首筋まで頭を剃る習慣がある。ひざまづいて礼をする。ラッコ、狐、鷺および鷺の羽を買うために人々がやってくる。

第2島プルムシル。第1島と同じ異人が住む。言語と礼拝が同じ…

第3島ムーシャ。別名オンニクタン。第2島と同じクリル人が住んでいる。…遠い島々およびカムチャツカにラッコ、狐などを買いに〔出かける〕。多くの者はポリシャヤ川〔現在のポリシェレツクのあるとこ

ろ]の言語〔カムチャダル語〕を知っている。なぜなら岬〔カムチャツカ半島南部をさす〕の異人たちと商売し、結婚するから。(村山 1987)

→カムチャダールとクリルの通婚、言語もバイリンガル化

→18世紀前半に、クリルとイテリメンの関係が急速に接近した可能性は考慮できる

交易、言語、婚姻、物質文化

外見だけではほとんど区別がつかないような状況が生じたことも考えうる

(2) 第2次 V. ベーリング探検隊関連の記録 (1733 ペテルブルグ出発, 1740 オホーツク出発, 1742 ペトロパヴロフスク帰着) * 第1次 1725 ペテルブルグ出発, 1727 オホーツク着, 1728 オホーツク発, 1729 カムチャツカ・オホーツク海探検, 1730 ペテルブルグ着

【クラシェニンニコフ(Krasheninnikov1755), ステラ(Steller1774)】

「近いクリル (the Near Kurile)」=カムチャツカ半島南端部・シュムシュ島に居住

「遠いクリル (the Far Kurile)」=パラムシル島以南に居住

→土器使用の記述なし

→「近いクリル」のほうが方言多い

※クラシェニンニコフ (Krasheninnikov1755) とゲオルギ (Georgi1776) による千島アイヌに関する記述 (佐々木 2014, 漢数字はアラビア数字になおした)

(a) 自称

彼らは自称を「クシ」(куши, kushi 村山七郎によると正確には kuzi であるという (村山 1971:272-273)) という。ロシア人は彼らを指して「クリル」(курил, kuril) とよぶ。千島でも南の島 (国後, 択捉, 得撫) の住民は自らを「キフ・クシ」(кых-куши, kikh-kushi) という。ただし、クラシェニンニコフもゲオルギもまずは「キフ・クリル」(кых-курил あるいは kikkutilen) と表記しており、クラシェニンニコフがそれを訂正している (Крашениников 1949:174)。

(b) 体格

千島アイヌとカムチャダールは生活の面で非常によく似ているが、体格と言語は大きく異なる。彼らは中程度の長身で、黒い髪の毛、丸い顔をしていて、肌の色は暗い。そして、顔に深い髭を生やし、体中が毛で覆われている。

(c) 髪型

彼らは額を頭頂まで剃り上げ、残りの髪を背中に伸ばしている。

(d) 刺青

男性は唇の中程に入れ墨を入れ、女性は唇の周り全体に入れ墨を入れている。ゲオルギによれば「男女ともに顔に、さらに手、腕にもツングース様の文様を刺し込む」という。

(e) 衣服

彼らの衣服は海鳥、キツネ、ラッコ、その他の海獣の毛皮でできている。しかし、彼らは木綿や絹などなじみの少ない生地で服を作るのが好きである。ゲオルギによれば北部ではイラクサの繊維から作った布で服を作る (i の項目参照)。

(f) 住居

彼らの住居はカムチャダールと同じようなものである（堅穴住居であることを意味する）。ただし、彼らは室内を絨毯やむしろで飾り、カムチャダールと違って常に家を清潔にしている。

(g) 食べ物

彼らは海獣の肉をよく食べるのに対して、魚はあまり食べない。ゲオルギは彼らの食べ物は主に海獣と陸獣の肉、鳥肉、魚、それに野生の植物の根と果実だが、特に南の島の住民を中心にコンブに食べ、時折日本製の砂糖に入った甘い菓子類が食べられることもあると記している。

(h) イナウ

彼らは常に削りかけを立てる。それらは「イングル」（ингул, ingul）または「インナフ」（иннаху, innahu）と呼ばれる。最初に捕れた獲物（別の報告書には「最初に捕れたラッコ、ラッコの子、またはアザラシ」とある（Крашенников 1949:738））は必ずこのインナフに捧げる。その肉を食べるときにはその毛皮をこのインナフの近くにかける。家が古くなって新しい家を作って引っ越すときでも、このインナフと毛皮はそこに置いていく。航海のときは必ずこのインナフを持参し、嵐に遭うとそれを海に投げ入れて風に供える。特にロパトカ岬（カムチャツカ半島の南端）と第一島（シュムシュ島）の間にできる渦の中に入れることが多く、アイヌとともにこれらの地域に暮らすカムチャダールも同じようにする。

(i) 仕事

夏は皮舟で猟に出かけ、冬はスキー（かんじきのことか?）を履く。男たちの主生業は海獣狩猟である。女たちの仕事は裁縫とむしろ編みだが、猟の時に舟の漕ぎ手としてかり出されることもある。ゲオルギは同じ項目を、「人々は海獣、鳥、クジラなどの捕獲と狩猟、漁撈に従事する。彼らのボートは森で得られる材木や流木で作られており、両端にシャベルがついている一本のオールで漕ぐ。女性は食料や衣服の準備に余念がなく、北部ではイラクサの糸を績んで織る。賢さと習慣の点で北部の島民よりも勝っている南方の島民は、クジラの脂、毛皮製品、矢羽根に使う鷲の羽などを持って日本に商売に出かける。彼らはそれらと引き替えに日本野金属製品、漆器、鍋、刀剣、さまざまな布生地、装身具、小物、たばこなどを受け取る。」と記している。

(j) 客の歓待

異なる島からの来客に対して、独特の歓待の仕方をする。すなわち、客側も迎える主人の側も、戦いの装束を身につけ、刀や槍をふりまわし、弓を絞ったりして、これから戦いを始めるのではないかと思えるほどである。しかし、実際にはみんな踊り合っており、寄り添ってきわめて緊密な挨拶を交わす。それから家に招かれ、宴会が開かれるが、そのときまず客側の長老が立ち上がって、前回別れてからこれまでに自分たちに起きたことを話す。それが終わると主人側の長老が立ち上がって同じように話す。それらは延々と続くが皆じつと聞いている。長老の話が終わり、皆がひとしきり喜んだり悲しんだりしてから食事が始まる。

(k) 結婚

妻は二～三名は持つ。妻とは寝起きせず、夜こっそり会いに行く。またジュパン（жупан）もいた。村山七郎は、このジュパンを「囲いもの」と訳しているが（村山 1971, 6 頁）、この言葉が本来ダリーの辞書の説明にあるカムチャツカ方言で天幕に空気を入れるための地下管（Даль 1977:1367）のことだとすれば、そのように呼ばれる人物は社会的に女性として振る舞う男のことを指すと思われる。カムチャダールの家（堅穴住居）では、そのような者は正式の出入り口である天井から下りる階段では出入りせず、床面から地上にでている通風口（ジュパン）から出入りした。クラージュニンニコフは、当初コサクたちが知らないでこの通風口を入口だと思って入ってきて、「ジュパン」と間違われて笑われたというエピソードを残している（Крашенников 1949:376）。

(l) ウカル

姦通の現場が押さえられると間男と夫は決闘を行う。ただし、それはストウン (сутн) と呼ばれる 1 と 4 分の 3 アルシン (1 アルシン=71 センチとすると、124 cm程度-筆者註) の長さの棍棒で交互に背中を殴り合う。姦夫が夫を決闘に呼び出すことになるが、まず呼び出された方 (夫) が呼び出した方 (姦夫) を 3 回殴る。それから交代して後者が前者を同じように殴る。それを 3 回繰り返すという。当然最初に殴る方が有利である。決闘に応じなければ不名誉とされ、姦夫がそれを避けようとするならば夫に賠償をしなければならない。

(m) 出産

分娩は重く、回復に 3 ヶ月はかかる。子供に名前を付けるのは産婆で、名前は一生変えられない。双子が生まれると片方を殺害する。

(n) 葬儀

人が死ぬと冬は雪に埋め、夏は地面に埋める。自殺の例はカムチャダール同様に少なくない。
→「千島アイヌは精神的、社会的には完全にアイヌだった」(佐々木 2014, p.90)

(3) 18 世紀後半のロシア人との関係 (ポロンスキー1871)

1750, 1753 占守島首長ニコライ・ストロゼフが、ウシシル島で 10 人がヤサーク徴収に応じる。

1764 ヤコフ・ブーチン (カムチャツカ出身の先住民首長、千島アイヌの言語・慣習を理解していないが、息子が捨子古丹の首長であるので千島アイヌか)、幌筵・捨子古丹島でヤサーク徴収を試みるが失敗。

1766 ポリシェレツク政庁、チーキン (カムチャツカ出身の先住民首長?) に幌筵・ウシシル・捨子古丹などの住民を帰属させる命をうけ、ウシシル島の 9 人からヤサーク徴収。途中チーキンが急死したため、補佐役の Cholnui が税徴収および島の調査を担当。

1766~1768 12 人の流移人を発見し、幌筵・捨子古丹島へ復帰させる。新知・択捉島からウルップ島にきていたアイヌにヤサークを収めることを同意させる。択捉島では全島からヤサーク徴収に同意させる。

1770~1772 ラショワにいた 34 人の流移人からヤサーク徴収。ケトイ島にも流移人がいた。

1777 シャバリン 根室ノツカマップ・厚岸来訪。5 日間の滞在中、チーキンを通訳として、日本人との修交希望をつたえる。

→ロシア人の本格的な千島南下、暴力的な手段を使い 18 世紀後半に断続的ではあるがヤサーク徴収。

→定住していない千島アイヌがかなり存在しており、千島アイヌはかなり自由に列島内を往来。

3. 19 世紀以降のロシア人による総説

【A. S. ポロンスキー (1871) [榎本武揚ほか訳 (1875)]】

「通例、此島人の住家は、海辺に流れ寄りたる材木を用ひ、方形に造り、屋上は平坦にして、窓は少なるを、膀胱にて張りたるものなり。屋上に穴あり。烟の逃路とし、兼て門戸の用をなす、家の中には中央に炉あり。床は土を堅めたる上に、席を延べたるなり。四壁に従て箱を並べ置、衣類などを入れ置、夜間は兼て臥床の用をなさしむ。其他、装飾とも云ふべきは、僅の日本器物、又は炊具等のみにて他物なし。」(p.47)

「男は鳥獣の外、^{バイダル}皮舟、^{ユルト}小屋、弓矢、踏機、締縄を造る事の業をなし、且隣人との交易をなすなり。

女は家事を修め、飲食を備ふる事、鳥獣皮を調理して衣服に造り、草履を製し、鯨の筋或は野麻^{イタゴサ}を以て糸を製り、又は草木の根を調べて莞筵を造り、楊樹皮を調べて布を織る等の業をなす。

島人の食料とするものは、「ネルプ」アザラシ「シーウチ」〔割注 海豹に耳のあるを「シーウチ」と云〕、鯨、狼虎の肉を、骨を去りて乾し、又は薫したるものと、脂を「シーウチ」の膀胱に貯え置くものの外、少しの魚あり。魚は第一、第二の島の川々へ入り来る所のものの外は、南部の諸島にて海に釣りて得る所の鱈及び「リヤムシャ」あり。魚を食料に備ふるには、或は乾して貯へ、或は煎て醬の如くし、乾固めて餅の如したるを、獣脂と昆布とを以て煎て食するなり。貝類は非常欠乏の時にあらざるよりは絶て食せず。昆布の一種、方言に「マリユ」と云うものは赤色にしてその形円し。多く貯え置て魚と共に煎て食するなり。此外草根木実の類にて、魚と共に煎て食するもの数種あり。胡蘿蔔^{ニンジン}并に昆布の一種、方言「ヌラ」と称するものを用ゆ。「ヌラ」は其幹^{ケダ}方にして其葉は長し。南部の島々にては米にて造れる日本の酒を用ひ、砂糖漬を食す。塩は用いざれども、製法は解し居て、魯人の求に必ずべき塩魚なぞも製する故、そのため日本製の鍋にて海潮を煎て、自ら塩を製す。

食時は、定時に家内の老幼並び居り、長者、即戸主なる者、己れ上座に居り、諸品とも己れ先ず取りて後一同へ長幼の序に順ひて分配す。此分配の間も、飲食の間も、長者即戸主は断へず「ゴー」「ゴー」と唱ふれども、他人は最も静肅にして食を終る迄一言をも発せず。食器は木椀、木杓子、日本鑄造の鍋の外に物なし。一体此諸島の民は小食にして、他の北部の民の如く大食を為さず。」(pp.49-50)

→18・19世紀の同時代史料には「クリル」が土器を用いた確実なロシア側の記録はない可能性がたかい。

文献

大塚和義編 2003 『北太平洋の先住民交易と工芸』 思文閣出版。

加藤九祚 1970 「カムチャツカの征服者アトラソフ」『西域・シベリアータイガと草原の世界ー』, pp.26-42, 新時代社。

川上 淳 2011 『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』 北海道出版企画センター。

斉藤由佳・小野寺歌子訳 2008 「コサック五十人隊長ヴラディミル・アトラソフの「陳述書」。1697年のカムチャツカ遠征について。」平川新監修、寺山恭輔・畠山禎・小野寺歌子編『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係 第3集(東北アジア研究センター叢書第31号)』, pp.17-23, 東北大学東北アジア研究センター。

佐々木史郎 2014 「鳥居龍蔵が会った北方民族：千島アイヌ」ヨーゼフ・クライナー編『日本とは何かー日本民族学の二〇世紀ー』, pp.78-96, 東京堂出版。

松本郁子・小野寺歌子訳 2008 「ヴラディミル・アトラソフにより救出された日本人デムベいの「陳述書」。日本について。」平川新監修、寺山恭輔・畠山禎・小野寺歌子編『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係 第3集(東北アジア研究センター叢書第31号)』, pp.24-29, 東北大学東北アジア研究センター。

村山七郎 1987 『クリル諸島の文献学的研究』 三一書房。

ポロンスキー, A. S. 1871 [榎本武揚ほか訳(1875)1979] 『千島誌』(北方未公開古文書集成第七巻), 叢文社。

Georgi, J. G. 1776 Beschreibung aller Nationen des Rußischen Reichs, ihrer Lebensart, Religion, Gebräuche, Wohnungen, Kleidungen und übrige Merkwürdigkeiten, Sankt Peterburg.

Крашенинников, С. П. 1755 Описание Земли Камчатки [Krasheninnikov, S. P. 1755 The History of Kamchatka and the Kurilski Islands, with the Countries Adjacent, American Classics Quadrangle Books.]

Len'kov, V. D., Silant'ev G. L. and Staniukovich, A. K. 1992 The Komandorskii Camp of the Bering Expedition, The Alaska

Historical Society.

Steller, G. 1774 *Steller's History of Kamchatka*, University of Alaska Press (translated by Engel, M. and Willmore, K. in 2003)

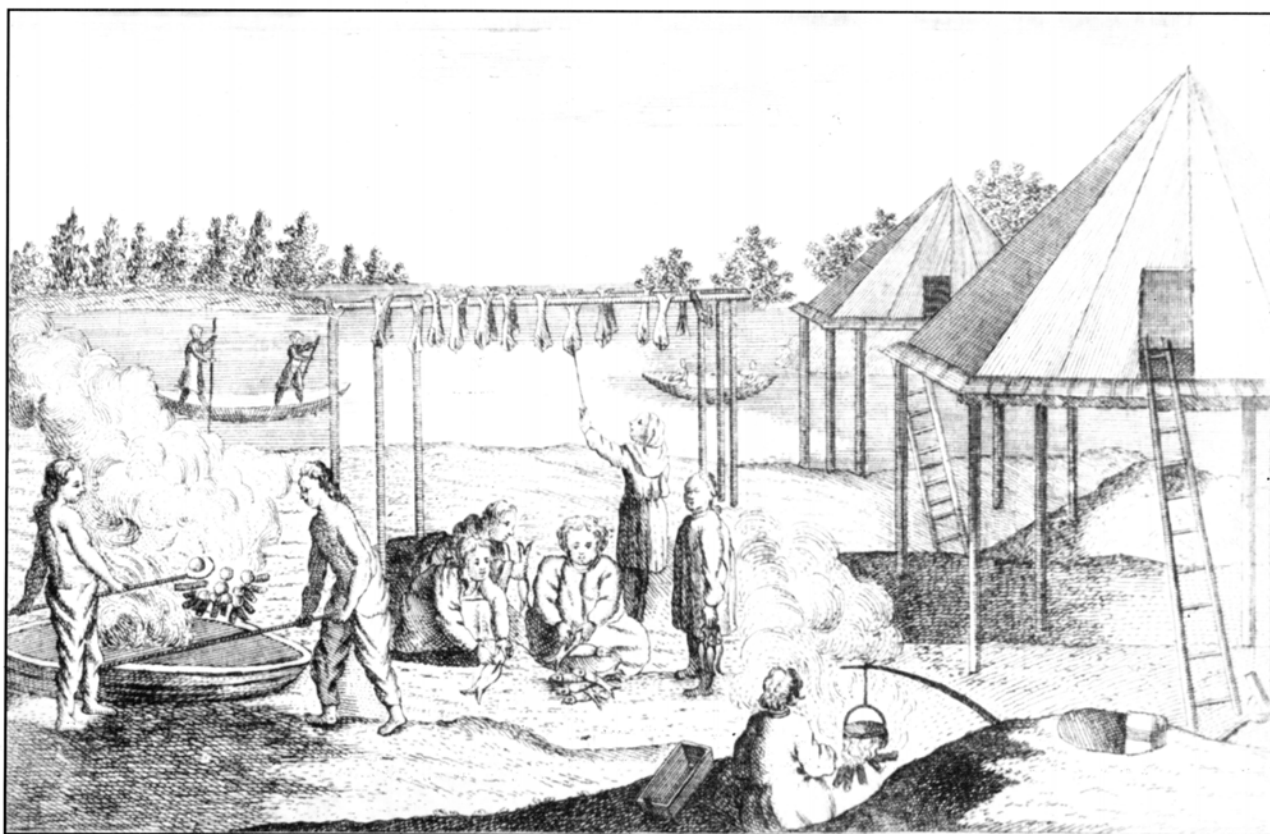
Witsen, Nicolaas 1692 *Noord en Oost Tartarye*, Amsterdam.

Оглоблин, Н. 1891 Две сказки Вл. Атрасова об открытии Камчатки. *Чтения в Об-ве истории и древностей российских.*

Кн. 3, с.3-18, Москва. (佐々木路子訳 2009 『アトラソフのカムチャツカ遠征記-』 (私家版))

Жданова, Н. Д. и Б. П. Полевого 1997 *Камчатка XII-XXвв.: Историко-геологический атлас*, Федеральная Служба Геодезии и Картографии России. Москва.

【予習用キーワード・テーマ】北海道では、縄文文化期から連続とつづく土器と竪穴住居の利用はいつ終了するのか？また、その後、加熱調理のための器と住居はどのように変化するのか？



ЗАНЯТИЯ КАМЧАДАЛОВ, XVIII в.

図1 18世紀のイテリメン (Жданова и Полевого 1997 原図: Крашенинников 1755)



Danish archaeologist Ole Schiørring by skull of Vitus Bering, Komandor Bay, Bering Island. Photograph courtesy of Ole Schiørring.

1725~1730年
1733~1741年
2回の探検

Len'kov et al. (1992)

図2 V・ベーリングとその墓の発掘



図3 デンベイの署名



図4 19世紀の交易ルート (大塚編 2003)